

# 機関リポジトリの持続と成長を目指すコミュニティ

「機関リポジトリ」の設置が全国の大学等に広がっている。  
NIIと大学の新しい連携の形として、日本の機関リポジトリの担当者コミュニティ  
「デジタルリポジトリ連合」が設立され、  
機関リポジトリの持続と成長を目指す活動を展開している。



鈴木雅子

Masako SUZUKI

小樽商科大学学術情報課係長

機関リポジトリとは、大学等の学術機関において、その機関で生み出された教育研究成果（論文、研究報告書、教材など）を電子的形態で保存し、無料公開するための電子アーカイブである。従来、一般にはあまり流通していなかった学術機関の教育研究成果物を世界中の潜在的読者に届けられることはもちろん、教育研究成果のショーケースとして社会に対する説明責任を果たす手段としても注目されている。

## NIIと大学の共同プロジェクト

共同プロジェクトとしての「機関リポジトリ (Institutional Repository : IR)」が初めてキーワードとして登場したのは、国立大学図書館協議会がまとめた報告書『電子図書館の新たな潮流』(2003年5月)(\*1)である。ここで「学術機関リポジトリによる学内学術情報の発信強化」がうたわれ、その実現のために「大学図書館とNIIによる先導的な共同プロジェクトを発足させるべきである」と提言された。同03年、国内初のIRが千葉大学で試験公開され、08年末には国内のIRの数は88に達した。世界では約1,300のIRがあり、日本は設置数で世界第4位である。

IRが急速に拡大した背景に、NIIの最先端学術情報基盤(CSI)の一翼を担う「学術機関リポジトリ構築連携支援事業」(\*2)がある。NIIでは04年から、国際規格に準拠したオープンな仕様でシステムを立ち上げられるよう、ソフトウェアに関する情報提供や人材育成を進めてきた。05年には、『新たな潮流』の提言を絵にかいた餅に終わらせまいとする当時の関係者の努力が実り、先導的な共同プロジェクトとなるCSI委託事業が開始された。

かつてのように、NIIが主導して大学に協力してもらおうといった一方通行的な体制ではなく、大学から課題解決のためのプロジェクトを募った点が特徴である。

06年3月に出示された科学技術・学術審議会の『学術情報基盤の今後の在り方について(報告)](\*3)による後押しもあり、05～07年度に実施された委託事業は、その成果を踏まえて08～09年度の第2期委託事業に引き継がれた。08年度は70以上の大学がパートナーとして協力し、事業を推進している。

「デジタルリポジトリ連合(Digital Repository Federation:DRF)」(\*4)は、日本のIR担当者のコミュニティとして06年11月に設立された。北海道大学を代表とし、千葉大学、金沢大学、大阪大学などが中心になって活動を展開している。新たにDRFに参加する大学・機関も増加しており、発足時に25だった参加機関が、08年には85機関(国立大学56、公立大学3、私立大学24、研究機関3)に拡大した。

## 全国規模のフラットな関係を築く

DRFの具体的な活動は、①公開メーリングリスト、ウェブサイトの運営、②年数回のワークショップ等、集合イベントの開催を2本柱とし、③著作権、アクセス向上等についての調査・研究、④海外の同種事業との情報共有、⑤持続的なコミュニティのあり方の検討なども行っている。

大学図書館には、学生や研究者が必要とする文献や書籍などを取り寄せるサービス(Inter Library Loan:ILL)や、目録の共同構築(NACSIS-CAT)などで協力関係があり、これまでも担当者が

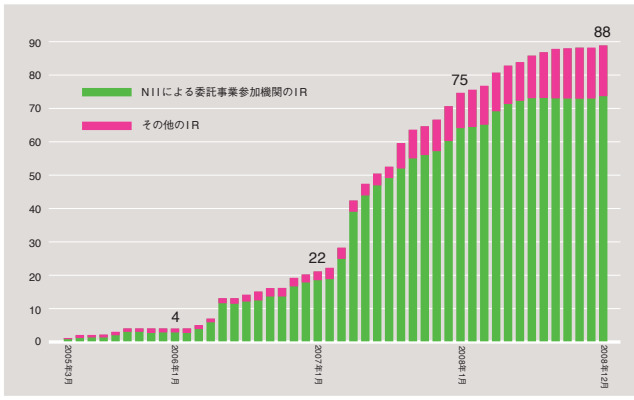
(\*1)<http://www.soc.nii.ac.jp/anul/j/publications/reports/74.pdf>

(\*2)<http://www.nii.ac.jp/irp/>

(\*3)[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015.htm)

(\*4)<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/>

## 機関リポジトリ公開数の伸び



DRFの活動等による情報共有にとまない、機関リポジトリ構築はNIIのCSI委託事業による支援対象大学を超えてひろがりつつある。

集まる機会は多かった。DRFではさらに、こうした一過性の集合研修機会では実現しにくい、全国規模のフラットで持続的な協力関係(コミュニティ)が育ちつつある。それを可能にしたのが、メーリングリストやウェブブラウザから簡単に編集が行えるWikiのシステムを採用したウェブサイトである。

小樽商科大学学術情報課係長の鈴木雅子氏は、DRFのメリットを、「組織を超えて担当者同士が情報交換し、助け合える場ができたこと。お互いの顔が見えるようになり、人対人としてやりとりできることが大きい」と語る。と同時に、DRFはIRについて相互に切磋琢磨し合う場にもなっているという。DRFのウェブサイトやメーリングリストはオープンであるため、IRを開設しようとする機関の担当者が、先行する大学の経験を追体験することができる。

それでも個別のリポジトリを構築するのが困難な場合の解決策として、広島県では県大学図書館協議会に加盟する11大学が連携して、1つのサーバによる共同リポジトリを構築し、08年4月から運用を開始した。事務局となる広島大学図書館が、各大学の自発的な取り組みを惜しみなく支援している。同図書館主査の尾崎文代氏は、「リポジトリは子育てに似ている。育て続けるためには喜びもあるが悩みも多く、仲間との情報共有や、先輩たちの積み重ねたノウハウを生かすことが大事。それを実現できる場がDRF」と語る。

## 人材育成や国際化の面でも貢献

DRFは緩やかなコミュニティであり、自発的に協力する意思のある組織・人が、できる範囲で協

力するというのが運営方針である。北海道大学附属図書館情報システム課係長の杉田茂樹氏は、今後の課題について、「数年で担当者が入れ替わる人事制度のなかで、培われたノウハウや人のつながりを維持していくことが最大の課題。また、総体としてIRが学術コミュニケーションの一角を支えていくためには、国際的視点で今後の方向性を見定めていくことも不可欠」と語る。

DRFでは、NIIが開催するIR関連の研修事業に協力するといった実績も積み重ねている。また08年には、EUの助成プロジェクトであるDRIVER(Digital Repository Infrastructure Vision for European Research)と協力関係(MoU)を締結するなど、国際化の面でも貢献している。

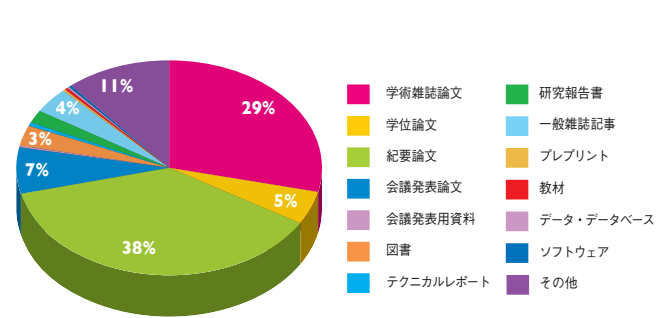
NII学術基盤推進部学術コンテンツ課図書館連携チームの杉田いづみ氏は、「ここ数年でIR構築の気運が急激に盛り上がったが、委託事業終了後も維持・拡大していくためのモデルを確立し、連携を強化しておくことも、DRFの大きな役割。NIIとしては、IRを今後も推進していくために、その効果を有形のものとしてアピールしたい」と語る。

IRは、図書館の情報提供を受け身から能動的なサービスへと根本的に変えるもので、図書館の存在価値を高め、図書館員のモチベーション向上にもつながる。鈴木氏は「IRの最大のやりがいは、研究者の方たちとのコミュニケーション。『IRから自分の論文が読まれていることを実感して研究の励みになる』と言われた時は嬉しかった」と語る。

DRFがIRの活性化に資することで、日本の学術環境全体が活性化することが期待される。

(取材・構成 塚崎朝子)

## 収録コンテンツの状況 (JAIRO, 2009年1月末時点)



コンテンツ数: 573,010 件

(注 JAIRO <http://jairo.nii.ac.jp/>)



尾崎文代

Fumiyoko OZAKI

広島大学学術室図書館学術情報企画グループ主査



杉田いづみ

Izumi SUGITA

NII学術基盤推進部学術コンテンツ課図書館連携チーム 係長